
言葉一無の支配

—マルティーン・ヴァルザー—

洲崎 惠 三

言葉一無の支配 (Martin Walser) —レジュメ

Hyperion で Hölderlin は、この世は無、その未来も無と、我々を支配する無について歌っている。しかしこれはニヒリズムではない。この世がそれ自身何の意味もないとしても、我々は無意味に耐えられず、何らかの意味を与えようとする。無に意味を与えるもの、それが言葉である。Hölderlin の詩は、無に解消することを怖れる比類なき響きから成る。Goethe も無に抗い、生命あふれる作品を創作した。生命あるものが美しい。生は愛。Ulrike von Levetzow との苦悩の恋から Marienbad の悲歌が生まれた。実現の非在からこそ不滅の詩が生まれた。

Martin Walser の詩神は不在、欠如である。言葉は我々の欲求を表す。たとえば神は、永遠、遍在、全知など人間に欠如したものの願望像だ。言葉には、公の定型語彙と、私の生きた言葉がある。前者は世界支配、権威を目指す。後者は、私の経験から生じ、無の支配、すなわち我々の欠損を生きた言葉により充足することを目指す。これはニーチェの藝術観、すなわち Dionysos 的現存在の不条理に耐えるべく、ギリシア人は夢の Apollo 的芸術を生み出したという主張につらなる。はじめにロゴスありき。言葉はロゴス、光、生命、神である。暗い意味なき無に、美しい意味ある言葉で、意味ある存在を与えること、これが Martin Walser のいう「無の支配としての言葉」であろう。

キーワード5つ：マルティーン・ヴァルザー、無の支配、言葉、ヘルダリーン、ゲーテ

Martin Walser, die Verwaltung des Nichts, die Sprache, Hölderlin, Goethe

序 無が支配、無を支配

無から生まれ、無に消えゆく人間の生に根源的な一つの願いは、この無になんらかの意味ある有を創りだし、死に至る有限な時間存在にすぎないわれわれの生に永遠無限の現在 (nunc stans) を創りだそうとすることであろう。芸術の始源である。言葉の芸術たる文学もまたそうであろう。

マルティーン・ヴァルザーは、これを無の支配 (die Verwaltung des Nichts)⁽¹⁾ と名づける。「無の支配」の2格の「の」にはヤヌス両面の意味がある。一つは、この世は「無が支配している」という主格であり、もう一つは、「無を支配するという」目的格である。

この言葉はフリードリヒ・ヘルダリーン (Friedrich Hölderlin) の『ヒュペーリオン (*Hyperion*)』

に由来する。^④

「……私が生に眼を注ぐとき、すべてのものの究極は何であろうか？ 無（Nichts）だ。私が精神のなかを昇りつめるとき、すべてのものの究極は何であろうか？ 無だ。……われわれの上に支配している無に君たちも徹頭徹尾支配されているのだ……われわれが無のために生まれ、無を愛し、無を信じ、無のために身をすりへらし、そのあげくしだいに無に帰していくことを、君たちも底まで見ぬいている……」（「ベラルミンあてヒュペリオンの手紙」, H.3,45）

これはいわゆるニヒリズムではない。ヘルダグリーンほど全一なる神と自然を敬虔に歌ったドイツの詩人は少ない。むしろ、否定しえない冷厳な現世の事実を直視し、無に対抗し無を支配する言葉の美を創りえた詩人である。無の支配にあらがい、無を支配できるものこそ「言葉（Sprache）」であると、M・ヴァルザーは言う。

言葉を生命として生きている作家として当然の至言であろう。画家ならば色や形、音楽家ならば音というかもしれない。すなわち無の支配こそ芸術の生命といえるかもしれない。

ニヒリズムといえは、「人生は、そのあるがままの姿において、意味もなく、目標もなく、無へのフィナーレもなく、しかも不可避的に回帰する。すなわち永劫回帰。これがニヒリズムの極限の形である。すなわち無の永遠！」（「力への意志」, N. III, 853）^⑤とニーチェは言った。しかし彼も、「美的現象としてのみ、世界と現存在は是認（存在証明）される」（「悲劇の誕生」, N. I, 14, 40, 131）、あるいは「生成変転に存在静止の性格を刻印することこそ、力への最高の意志なのだ。」（「80年代の遺稿から」, N. III, 895）として、「生きる力への意志としての芸術」を称揚する。

永遠に寄せては返す波のように、意味なく反復する無の支配に抗する防波堤としての言葉。

小論では、第一に、2007年3月27日に80歳を迎えたボーデン湖畔に住む現代ドイツを代表する作家マルティーン・ヴァルザーの『無の支配』（2003年）と、第二に、1942年12月6日オーストリアはケルンテン生まれ現在67歳のペーター・ハントケ（Peter Handke）の『サント=ヴィクトアール山の教え』（“*Die Lehre der Sainte=Victoire*”）をこの視点から取り上げる。（第二は、次回）

1 相応（entsprechen）

われわれの宇宙は約137億年前ビッグ・バンにより誕生し、いまなお膨張加速を続けているといわれている。ではそれ以前はどうであったのか？ これからはどうなっていくのか？ たとえばわれわれ人間の住む地球は約46億年前に生まれ、約30億年後には、銀河系星雲とアンドロメダ星雲との衝突によって消滅するともいわれている。生命、なかんずく人類の発生と未来は？（宇宙や生命の起源については科学月刊誌 *Newton* 最新号、佐藤勝彦『宇宙論入門－誕生から未来へ』岩波新書、2008年による）

『無の支配についてのいくつかの序説』（VN）でヴァルザーは分子生物学の成果を踏まえ「生命の起源」から出発する。核酸（Nukleinsäure）と蛋白質構成要素（Proteinbausteine）とが次々と衝突しても生じることはなかった最初の生命細胞が誕生したのは数十億年前といわれる。細胞増殖、進化を経て約十数万年前人間（*homo sapiens neanderthalensis*）が生まれるまでには巨大な偶然を

必要とした。「人間は最も起こりえないものであった。人間の誕生を促進した偶然（Zufalle）は、核酸連鎖による蛋白質構成要素記号化のさいの読み取り変異といわれている。」（VN, 13）

人間がこの世に生まれてきたことがまったくの奇蹟であり、突然変異の冒険と進化の軽はずみないたずらであることを、古代人は各地ですばらしい想像力による創世神話で比喩的に表象した。宇宙や人間を生んだXを神や神々としてとらえた。そのとき古代人は詩人であった。

「神が天地を創造した初めに―地は荒涼混沌として闇が淵をおおい、暴風が水面を吹き荒れていた―光あれ」と神が言った。すると光があった。神は光を見てよしとし、光と暗を分けた。神は光を昼と呼び、闇を夜と呼んだ。夕となり朝となって、一日が終わった。」（『旧約聖書』、創世記、前田慶郎訳、「世界の名著13」中央公論社、1978年初版）

神と人間、天と地、精神内面世界と物質外面世界とは太初調和し、相互に相応していた。神、自然、人間調和の黄金時代である。ところがエゴイズムによる人間の物質化外面化のせいで、両者は乖離し始め、相応しなくなった。エマーヌエル・スヴェーデンボルグ（Emanuel Swedenborg）の相応理論（*correspondentia=entsprechen*）を念頭にM・ヴァルザーは言う。

「世界がわれわれと相応する（ぴったり合っている、相互の要望に応える）なら、文学は存在しないだろう。もちろん宗教も存在しないだろう。世界は最も深いところでわれわれに相応していない。われわれはそれを望んだわけでもないのに、この世に生み落とされた。そしてそれを望みもしないのに、この世からおっぼり出される。この世の由来も、無。その未来も、無。

このような表現法はもちろん言葉にほかならない。われわれには言葉がある。この言葉で、われわれの無知に反応し、われわれの無知に対応するのだ。

なぜ世界はわれわれに相応していないのか？ なぜなら世界はそれ自体何の意味ももっていないからだ。われわれは何の意味もないものには耐えられない生き物である。だからわれわれは何の意味ももたないものに意味を与えるのだ。無意味性を究明することがすでに意味を創っている。われわれの意に沿う。

書くということは、われわれに相応しない世界に相応することだ。書きながらわれわれは欠如（Mangel）に応じている。われわれの念頭に浮かぶのは、われわれに欠けているものである。」（『言葉、そのほかは無』、SsN 153、初出 *die Zeit*, 1999）

無がこの世を支配しているなら、無の支配に抗い、この世の生になんらかの意味ある有を創造しようとする人間のひとつの武器こそ言葉なのだ。

2 欠如こそ言葉の源泉

言葉の母胎は欠如（Mangel）だと、ヴァルザーは言う。欠如、欠乏、欠損、欠陥、不足、欠点、損傷、窮乏、困窮、困苦、抑圧、苦悩などこそ、言葉や文学の源泉であるという。何かが欠けているから、人は書いたり説んだりする。何も欠けていないならば、その必要はない。人間の精神活動の源泉は欠如態である。欠けている者だけが、書く必要に迫られる。欠如があれば、それを充足し

ようとする。エロスもしかり。欠乏こそ希望のエネルギー源とするエルンスト・ブロッホ (Ernst Bloch) 『希望の原理』 (*Das Prinzip der Hoffnung*, 1955) との時代精神の共鳴は明らかである。

言葉のなかにはつねにわれわれに欠如しているものが含まれている。われわれは何かをもたないから、言葉をもつ。たとえば「神」という言葉は、全智全能、遍在、不死、永遠など、人間に欠けているものすべてを備えているユートピアの願望像を表現している。欠如が言葉を生む。欠陥現実を言葉のファンタジーによって補償することが文学の根源のひとつなのだ。書きながら欠如に反応するとき、生は耐えられる可能性が生まれる。

最も愛する者との死別ほど、欠如の苦悩が深いものはない。ゆえにその蘇り、復活を願わぬ者はいない。しかし復活は人間には許されない。Orpheus は愛する亡き妻 Eurydike の蘇生を願って冥府へと下るが、うしろを振り返って見てはいけないという Hades の命令に背き願いは消え失せる。復活という言葉ほど「無」という言葉に近いものはない。それにもかかわらず「復活」を願うこと、それを言葉や音楽に表現すると、そこには欠如せる復活に対する荘厳な補償がほのかに光っている。無の支配とはそのようなほのかな光りだ。キリストやソクラテスは時の権力に抹殺されたが、その魂は言葉となって今も人びとの心のなかに生きている。

わがミューズ神は「欠如」だと、ヴァルザーは言う。(MMM, 115ff.)。自分に欠けているものこそ、創作の動機であり、着想の源泉である。現代人は何に欠けるのか？ 自己の存立根拠、存在意味、存在証明、すなわちアイデンティティーである。人間らしく生きようとする欲求が強ければ強いほど疎外される。社会に順応していくためには、自己を捨てなければならないことが多い。外面的自己実現と内面的自己実現は相応すること少ない。Anselm Kristlein を主人公とする三部作 (Trilogie) 『ハーフタイム』 (1960), 『一角獣』 (1966), 『失墜』 (1973) や, Xafer Zürn の『心理療法』 (1979) などにより、アイデンティティー確立と喪失、支配と従属、適応と挫折の物語を編み出してきた。『暴れ馬』 (1978) 『潮騒』 (1985) 『愛の履歴書』 (2001) 『愛の瞬間』 (2004) 『恋する男』 (2008) など、男女の愛や性をテーマとする小説群も、欠如と充足、老いと若さをめぐり、生の意味を問うストーリーが多い。一角獣は欠乏とエロスと衝動と清純を象徴するだろう。

3 生きた言葉 (Sprache) と定型語彙 (Vokabular)

M・ヴァルザーは、言葉を二つに分ける。Vokabular (定型語彙、常套句、決まり文句、ステレオタイプ) と Sprache (生きた言葉) である。定型語彙は、伝統の、既存の、権威ある通用語であり、たとえば学術語、教会、マルクス主義、マスコミなど、正統性、普遍妥当性、世界支配をめざしている。個人的経験をシャットアウトした防水加工の形式的常套句である。これに対して生きた言葉は、自分の経験から難産の末生まれる。経験とはつねに私の経験であり、そこから初めて生きた言葉が生まれる。私の経験による私の言葉こそ生命ある言葉である。自分の生きた経験のない者は定型語彙に頼る。キリストやマルクスの発生の言葉と、ドグマ化したキリスト教やマルクス主義の術語の対比である。前者には生命と美があり、後者には支配と権力と形骸化とがある。自分の言葉は支配的普遍的であろうとはしない。「自分のために表現し、まさに感じ、考え、思い、迷い、つ

まり存在している者のようにしか話さない」（VN, 87）「私は自分の近くにとどまろうとすればするほど、むしろ私は他の多くの人びとの近くにいる。」（VN, 89）生きた言葉は経験でき、実存する者に話しかけ、正当である必要はない。定型語彙は理解でき、知識ある者あてで、正当性を要求する。

言葉は、私の経験、感情に基づくこと多ければ多いほど、それだけ豊かになり、生命をもつ。カール・バルト（Karl Barth）、ゼーレン・キルケゴール（Søren Kierkegaard）、フリードリヒ・ヘルダーリンなどの、神に対する言葉、姿勢を事例に生きた言葉を説くM・ヴァルザーには説得力がある。

「定型語彙は世界改良と取り組む。生きた言葉にかかわる者は、無の支配と取り組む。私の仕事は、あることを、それが存在しないほど、美しく言うことにある。」（VN, 89）

これは、ニーチェの「美的現象としてのみ世界の現存在は是認される」、あるいは「芸術は生命感情の最大の高揚であり刺激剤である」（N, III, 752）、あるいは「生の本来的課題としての芸術、生の形而上学的活動としての芸術」（N, III, 694）につながる。

『歴史の生に対する利害』（N I, 209）でニーチェは「私の活動を増大させないか、ないし生き生きさせないで、ただたんに私に教えるすべてのものはすべて嫌悪する」（Schiller あて手紙, 1798. 12.9）というゲーテの言葉を引用している。ヴァルザーはこれを受けて「われわれに生命を与えるものだけを、われわれは役に立たせることができる。それが古典だ。」（AWK, 240）と『クラシカーとはだれか？』で言う。

生命あるものこそ美しく、美しいものは生命力をもつ、これがヴァルザーのモットーである。

それは言葉にもあてはまる。決まり文句、常套語となって権威化している語彙、定型句に対する抵抗、嫌悪である。自己の弁証法神学は「あらゆる肯定否定の彼岸ないし中間である神の真理の証し」でありたいと言った若きカール・バルトや、『ヘーゲル法哲学批判』の若きカール・マルクスの言葉は、いかに経験された現実がそれに対応する人間に生きた言葉を生みだすかの例証である。なぜなら自己の内面の危機に直面して生まれた言葉であるからである。これに対し教義やテーゼはドグマ化し硬直化している。つまり権威、権力となり、世界支配に奉仕している。言葉とその対象の硬直化した同一性を批判するアドルノにも通ずる。

生きた言葉は、自分の言葉、自分の経験による言葉である。自分に欠如したものを充足したり、強大な力の侵害に危機に瀕した自己のアイデンティティーを守ったりする必死の対応から生まれる言葉である。そういう言葉は生命があり美しい。

そういう生きた言葉は、水の中から背を現わし、飛び跳ねてふたたび姿を消す魚の、沈みかける腹が銀色に光る瞬間のようなものだという。（AWK, 239）生きた言葉、無を支配する美の誕生の瞬間だ。

4 ダヴィデとゴリアテ、美と権力

定型語彙は、正統性証明、権力行使に使われる。生きた言葉は不当な権力行使への抵抗のさいに生まれる。

生きた言葉（あるいは「美」）と権力行使（あるいは「無」）の関係を、ヴァルザーはダヴィデと

ゴリアテ、小と大、美と巨力の関係で言い表す。醜い巨大な権力ゴリアテに対する小さな生命ある美の象徴としてのダヴィデ。褐色の髪の毛の美しい少年ダヴィデは恐竜のような巨人ゴリアテの肩間に石を投げて打ち殺す。この小さな石こそ生きた言葉なのだと、ヴァルザーは言いたいのだろう。加藤周一は「言葉と戦車」(1969, 筑摩書房)と言った。

たとえばアイスキュロスの『縛られたプロメテウス』。全能のゼウスの権力行使に対するプロメテウスの苦悩と忍耐の叫び。「なんという不正にわれは耐えしか。」どんな苦悩や孤独のなかにあっても侵すことのできない我意がそれを訴える。希望がまったくないときに希望を物語上どのようにもつのか? そもそもこの物語が存在するという以外どんな希望もない希望こそ、物語の意味であるかのようだ。権力による屈服、苦痛、絶望、それを表す言葉のなかにしか希望はない。それが生きた言葉であり、美しい。物語とは、耐えがたくなり始めたものの反復である。耐えがたいと言わざるをえないとき、その反復は保証される。(cf.『人間的裁量』, VW, 57ff.)

ニーチェは、プロメテウスやオイディプスやアトレウス神話は、生存の恐ろしい不条理が生み出す苦悩に耐えるために創られたオリュムポスの神々、アポロの光りであるという。「一切の認識の上に無意識に君臨するあのモイラ、偉大な人間の友プロメテウスのあの秃鷹、聡明なオイディプスのあの恐ろしい運命、オレステースを母殺しに駆り立てるアトレウス末裔のあの血族の呪い、かかる神話的实例は、オリュムポスの神々というあの芸術的中间世界を通してなのだ。生存を全うするためにギリシア人は、これらの神々を最も深い必要に迫られて創造せざるをえなかったのだ。Olymposの世界を成立させるに至ったものは、芸術を人生のなかに呼びこむ衝動であり、生き続けるようにと誘いつつ、生存を補足し、完成しようとする衝動である。オリュムポスの世界のなかで、ギリシア的意志は、目の前に一個の光明化の鏡を掲げたのだ。」(『悲劇の誕生』西尾幹二訳, N. I, 30) あのように美しい芸術を生みうるためにギリシア人は、どれほど多くの苦悩に耐えねばならなかったか。現存在の恐怖と凄惨(Dionysos)を知覚していたからこそ、生き抜くためにそのぞっとする現存在の実相の前に、光り輝く夢の産児(Apollo)を立てねばならなかった。(N. I, 30) 無の支配にあらがい、無を支配する言葉、というヴァルザーの主張も、このディオニューソスとアポロの弁証法的相剋という相でもとらえられよう。

しかしプロメテウスの無力は権力の裏返しでもある。大が大のままであることはなく、小は小のままであることはない。力と無力、支配と従属の関係は固定的なものではない。昨日の犠牲者が、今日の加害者にならないとはいえない。ここには古来くり返されてきた支配と服従、強弱、大小のあいだの、国家、民族、組織、個人間の支配力学、巨人と小人、ゴリアテとダヴィデ、醜と美の相互弁証法が語られているのだが、1998年以降続いた『平和賞受賞演説』や『ある批評家の死』などをめぐる騒動についてのヴァルザー自身の想いも読み取ることもできるだろう。それはドイツ人の深層心情に陰に陽に迫らなかつたはずがない。ヴァルザーが知名ドイツ人5,000名のなかで法王ベネディクト16世に次ぐ2番目の関心をもたれているというインターネット・データはまったく理由のないことではない。

反権力が権力となり、弱者が強者となり、小が大となる。すなわち反転して他の人権を侵害し損害を与えること。たとえばマスコミ。自己が第三権力になったことを自覚せず、反権力が権力とな

って、政治を支配すること。それを象徴するのが「アンティ・ゼミティスムス (Antisemitismus)」というステレオタイプの硬直した決まり文句である。「反ユダヤ主義」ではないが、ハインリヒ・ベル (Heinrich Böll) の「カタリーナ・ブルームの失われた名誉」(Die verlorene Ehre der Katharina Blum, 1974) も同じカテゴリーに属する。マスコミの無責任な情報操作が、善良な小市民の人権を侵害して、無実な人間を犯罪者に追いやっていく。大戦後60年以上たつてなお悪者はドイツという非難は硬直化儀式化している。モラルの棍棒である。

ヴァルザーはゴリアテではない。マスコミは安保のころはゴリアテに石を投げたダヴィデであったが、いまはゴリアテに変身している。

硬直化し形骸化した固定概念批判こそ、アドルノのいう同一性批判であろう。ある対象やある事態を記号化する概念や定型語彙は、発生時には生命をもつが、対象や事態の変化に伴い空洞化し生命を喪っていく。記号づけるものと記号づけられるものの同一性は生命を喪う。概念と事象との固定化、同一性批判こそ、知性の機能の本質であろう。

古来戦争は絶えない。権力あるものとなないもの、支配と従属の関係はいつでも起こっている。特定の国の特定の行為がとくに抜きんでて反人道的犯罪であるというわけにはいかない。巨大帝国の弱小民族、弱小国家に対する権力行使は、いかなる弁明をとまおうとも、その非人間性、残虐性において、免責されるはずがない。X国の核爆弾使用は人道的で、Y国の毒ガス使用は非人道的であるともいうのだろうか。

古来数千年の歴史をもったユダヤ人問題、イスラム教キリスト教ユダヤ教、イスラエルとパレスチナ問題等は、われわれ日本人には、いかに深い認識をもったとしても、軽々に論ずるわけにもいかないし、そもそもの確な判断も下せないだろう。

しかしヴァルザーが特定の権威化した常套語が生きた言葉ではなく、他人を非難するために無反省に使用されている、という主張は理解できる。戦中戦後良心的インテリ層を「非国民」「アカ」呼ばわりしたレッテルも同じである。フランス革命やアメリカ独立時に宣言された「基本的人権」という生きた言葉も、今日では「基本的人権を侵害している」と主張する方が他人の基本的人権を侵害している事例は日常少なくない。

無が支配するこの世にあって、その無を支配できるのは言葉だというとき、その言葉とは、権威化硬直化した決まり文句、常套句、定型語彙ではない。正統性は私の側にありと無責任にそれを濫用する権力に傷つけられた自己の存立根拠をとりもどし修復しようとする、自己のアイデンティティの危機から生まれた言葉である。

いかなる現世の権力もやがて消えうせるが、「聖書」も「神曲」も読み継がれ、多くの人びとの心に生き残っている。「自己否定のイロニーより生きのびたいかなる支配形式もない」とはヴァルザーの「自己意識とイロニー」¹⁰の最後の言葉だ。

5 ヘルダリーン

無から生まれ、無に消えゆく、と歌ったヘルダリーンはけっして無神論者でもなくニヒリストで

もなかった。その反対である。ドイツでもっとも敬虔に神を歌い讃えた詩人のひとりであった。ヴァルザーが言いたいのは、ヘルダリーンが独自の比類のない言葉で神を歌ったことである。その言葉が生命力をもち、美を生む。

「神とは何か？ 未知であるが、それにもかかわらず
その空の相貌は特徴にみちている。
すなわち稲光、
怒りは神のもの。あるものは不可視であればあるほど
未知のものにふさわしい。しかし雷鳴は
神の眷れ。不死への愛、われわれの宝物であるその特性も、
神のものだ。」（「神とはなんだろう？」 1825, H. 2, 210）

「歌わねばならぬとき……花々も水を求めるように われらは
神がいますかどうかを手探りするのだ……」（手塚富雄訳、「ムネーモシュネー」 1803, H. 2, 195）

稲光、雷鳴、花、水、光、大地、すべては神的なものとして一つの名、一つの意識、一つの存在をもつ。ヘルダリーンの時の行間から宇宙的神学を読みとることができる。（cf.『定型語彙と生きた言葉』, VN, 73ff.）

「Nah ist	神は近くに存在するが、
Und schwer zu fassen der Gott.	つかまえるのはむづかしい。
Wo aber Gefahr ist, wächst	しかし危険のあるところ、
Das Rettende auch.	救いの手も育つ。」（Patmos「パトモス」 1803年, H. 2, 165）

ゲーテ、シラー、ヘルダリーンにはまだ神や神々は生きていた。

神を歌うヘルダリーンの詩は、けっして否定のなかに休息しない。たんなる祝福や否定だけということはない。無と、無に解消することへの抵抗が、同等に彼を動かしている。その讃歌的調べは、無が支配することへの怖れによって生きている。無と無に対抗する力の糸が織りあわされたその比類のない調べは、暗闇に光りを求める詩作であり、われわれの欠如の光明化である。それが「無の支配」である。核酸とタンパク質成分の遭遇は、より高い形式が生じたとき初めてエンテレヒーとなり、生命のない単純反復から、多様なものつまり生命が生まれた。無への逆戻りへの怖れがたえず生命を生み出す。（cf.『無の支配序説』, VN 25f.）

ヴァルザーは、停滞、凝固、安定、硬直を嫌う。トーマス・マンのイロニーを、安定せる市民意識のマグナ・カルタであり、世界支配としての肯定的自己意識だと批判したのも同じである。フィヒテの自我と非我の休止することのないピリヤード運動こそ自己意識の核ととらえたのも同じである。

無が支配するこの世にあって無に雲散霧消することに抗い、無を支配する生きた言葉を書くことこそヴァルザーの生命である。だからその言葉は美しい。人に訴える。

6 ゲーテ

無の支配、無への解消への怖れから生まれたヘルダリーンの詩、これこそ生命を生み、美を生む。それはヴァルザーのゲーテ像にもあてはまる。

「いかにゲーテは意味のなさに抵抗したか。いかに美しく無意味に逆らったのか。すでにそのことが美しい。美しいものとは、そもそも意味があるのだ。これこそゲーテというデパートで私が探し求めた商品である。信用のおける商品である。それ以上のことはない。しかしそれで十分だ。」(「ゲーテの魅力」, AWK, 214)

たとえばトロイ戦争のため生贄に供されたイフィゲーニエは、エウリピデス改作により、タウリス島の王妃となって、父アガメムノーンを謀殺させた母クリュタイムネーストラをあやめた罪でアテネを追放された弟オレステースを救う。いかなる状況にあっても、所与の状態のなかで、生きようと欲し、生きねばならないように生きるためにはどうすればできるのか、これがゲーテの課題であった。さまざまな人生の葛藤を、どうにか無事に進行させ、なんとか解決できるよう調整することが、ゲーテの要素であり実践であった。目標は解決である。

「人生はいつてみれば十分悪く、どういう瞬間にも美という分銅の重みで平衡をとらねばならない。美という対重は、たんなる人間存在の耐えがたさ、ないしこの耐えがたさに対する不安に由来する。美とは不安の娘である。私はゲーテにおいてそのことを学んだ。ゲーテの調和要求は、いまでも私に作用している。」(同書, 199)

「タウリス島のイフィゲーニエ」(*Iphigenie auf Tauris*, 1786) のような古典主義作品のように、生は不均衡であるからこそ均衡性への情熱を生む。不条理不調和であるからこそ条理調和を望む。生は醜いからこそ美を望む。これも欠如こそわがミューズ神というヴァルザーの詩論の視点からのゲーテ論である。卑小で無意味な現実に屈服するよりも、美しく善く意味あるものが生によりよい作用をもつ、ということにゲーテは力点を置く。どの物語も否定に終わらず、考えられうる最もよく美しい経過をたどることをみれば、ゲーテはひょっとすると、最後の明るい人だったのだ。「たとえば、高貴な勇気、卑劣さに対する抵抗、善意ある業績、良心からの情熱、美しい経緯としての物語、といったものが存在することを信じた最後の最も明るい人だったのだ。」(ibid, 213f.)

ヴァルザーの明るさを求める老ゲーテ像、これがトーマス・マン⁹⁾のゲーテ像批判にもつながっている。トーマス・マンは『非政治的人間の考察』(1918)においてドイツ内面性文化の擁護のために、ゲーテが市民革命には懐疑的で専制君主制のほうに傾いていたことを引用した。1932年ゲーテ没後100年祭には『市民時代の代表者としてのゲーテ』像を語り、アメリカ亡命後はデモクラシー擁護のためにいくつかのゲーテ論を講演する。そのなかで老ゲーテには「独特の冷たさ、悪意、意地悪、ブロッケン山のような移り気、自然妖魔的気まぐれ」、「大地的なもの、暗さ、人を当惑に陥れる要素、いやそれどころか悪魔的なもの」(TM: IX, 316f.)⁹⁾があるとされる。この「詩人の自然

妖魔的な無定見」(IX, 319)は「ヴァイマルのロッテ」(1939)でプロテウスのな「ニヒリズムのイロニー」(II, 445)となるが、これは内外面の危機に直面して自己正当化を模索していたトーマス・マン自身の自画像にほかならない。しかし私は、老ゲーテを何よりも明るく健康でありたいと望んだ人だと思つと、ヴァルザーは言う。

「一方の眼からは天国と愛が、他方の眼からは最も冷ややかな否定と最も破壊的な局外中立性とをそなえた地獄がのぞく」(TM. II, 439) 神ともニヒリズムともいえる「一切を包括するイロニー」(TM. II, 442), 「イロニーとしての世界支配」(II. 658)というトーマス・マンの、ゲーテ像、イロニー観を、ヴァルザーは「自己意識とイロニー」で厳しく批判した。

「ファウスト」第Ⅱ部⁹で、ファウストは憂いの吐息を吹きかけられ盲目となり、亡霊たちの墓堀(Grabe)を、沼を干拓して自由な民と共に生きる自由な土地の掘割(Graben)を作る槌音と聞く。そして瞬間に向かつて「止まれ、おまえはじつに美しいから」(Verweile doch, du bist so schön! 11582行)という。このセリフこそ、それをいえば、魂はメフィストーフェレスのものとなるという悪魔との契約である。

「初めにロゴスありき」をファウストは「初めに行為ありき」(1237行)と読み替える。海の潮と抗いつつ、海を埋め立て、無から有を生み、自由な土地に自由な民と共に生きる。およそ生活と自由とは、日々これを獲得してやまぬ者だけが享受する権利をもつ。行為こそが生の意味をもつ、というファウストの思念へ、メフィストは冷水を浴びせるのだ。

これを人間の行為への嘲笑や否定と見る人びとに対しトーマス・マンは強く反発する。ゲーテには、デモーニッシュで暗いもの、超人間的で非人間的なもの、単純なヒューマニストたちの心胆を寒からしめ怖がらせるようなものが漂っている。しかしこれこそ自然である。神性と魔性、ファウストのたゆまぬ努力とメフィストの冷笑的なニヒリズム、これはゲーテの魂に住む二つの対立矛盾する要素であつて、両者の壮大な弁証法的な相剋が内部で行われているのだ。しかしこの両極の緊張関係、諸対立の問題的な豊穡性、その壮大な弁証法のなかにこそ、この強力な存在の創造性がある、という趣旨のことを、トーマス・マンは「1949年ゲーテ年スピーチ」(*Ansprache im Goethejahr 1949*, IX, 493ff.)で言っている。¹⁰

マルティーン・ヴァルザーとトーマス・マンのゲーテをめぐる小説や論説については、問題が多岐にわたるのでまた別の機会に比較検討したい。

7 クリステアーン・ヴルピーウス (Christiane Vulpius)

「自ら助ける者の助け——ゲーテ試論」でヴァルザーは言う。ドイツでは「若きヴェルターの悩み」(1774)ではじめて感情の冒険ができるようになった。ヴァイマルのカール・フォン・アウグスト(Carl von August)公は、ゲーテがきわめて素朴であり、「自分の気持ち」を尊重して生きているから好むと言って、ゲーテを宮廷に招いた。革命に成功した隣国フランスと異なり、ゲーテはドイツ社会をではなく、感情と言葉を宮廷や教会への奉仕から解放した。ドイツで解放されたのは、思想、感情、言葉だった。(cf. AWK, 219)

ヴァルザーによれば、ゲーテのライフ・ワークは、16歳若い Christiane Vulpius との同棲共同生活であったという。ゲーテが貴族(男爵)の称号を授与されたあと、ヴァイマルでは彼が貴族の娘と結婚するだろうと思っていたが、選んだのは造花工場で絹花の針子として働いていた小柄な丸ぼちゃの小娘だった。推理小説を書いている兄のことを頼むべくイルム川辺公園で直訴したのがきっかけだった。ゲーテがローマに逃れ、ほぼ2年間にわたるイタリア生活で、自分の意欲に従って生きることが正道であると体験し、生き物としての自己に対する信頼を獲得しなかったら、彼女を発見することはなかっただろう、という。7歳年上の恋人だったフォン・シュタイン夫人(Frau von Stein)は、ChristianeのことをHと書いた。Hure(娼婦)の頭文字だけである。ゲーテの母を除いて真に友好的な言葉を言う者はいなかった。1789年息子 August が生まれたが、他の4人の子たちは死んだ。アウグスト誕生の17年後、1806年ナポレオン軍の侵入略奪から、Christiane がゲーテを守ったのをきっかけに結婚式を挙げた。ヴァイマルからわずか30km しか離れていないイェーナでゲーテの忠告に反しプロイセン側についたアウグスト公はナポレオン軍に敗れた。八百屋や馬丁の息子であることを誇りに思っているらしいフランス軍により、アンシャン・レジームの形骸化していた神聖ローマ帝国と貴族世界が瓦解していくという状況を、結婚という美しい形にゲーテは転化した。これこそゲーテの美しい大胆な人生作品であると、ヴァルザーは強く評価している。(cf. AWK, 223ff.)

イタリアにおける古典古代(Antike)体験が、狭苦しい環境に閉じこめられて苦しめられていた自然児の病気を治癒するものであり、解放され息を吹き返し「第二の誕生日」を迎えた37歳の詩人が、アンティーケに触れて精神的にも肉体的にも「全体性」を求め、人間として芸術家として自己発見自己形成を新たにした、という視点では、トーマス・マンの『ゲーテ・ファンタジー』(Phantasie über Goethe, 1948)も同じである。クリスティアーネとの出会いによって生まれた「ローマ悲歌」(Römische Elegie, 1795)の「眼差しに情欲が続き、情欲に享楽が続いた」経緯の評価も、ヴァルザーと変わらない。しかしトーマス・マンは、74歳のゲーテがエロスを断念するいわゆる「諦念」(Entsagung)の直接の契機となった『マリーエンバート悲歌』(Marienbader Elegie, 1823)の相手ウルリーケ・フォン・レーヴェツォーとの恋を、『ヴェニスに死す』に変曲、パロディー化した。ヴァルザーは恋の内的プロセスそのものを美しく創作した。

8 「恋する男」、ウルリーケ・フォン・レーヴェツォー (Ulrike von Levetzow)

ゲーテは人生において、そのつど最も生命力あるものに惹きつけられた、とヴァルザーは言う。しかもそれは、生の証明がまだ必要なところである。自分の生にまだ何か欠けているところで、生は最もいきいきする。すでに名づけられた感情で生きるのみではなく、すでに力となったすべてを自分自身の感情で吟味すること、しかも飲食を自らに取りこむような感覚でもって、自分に合った、役に立つものだけを認めること。これはゲーテの最も重要な示唆だ。しかも自分自身の経験に即すること。ゲーテが自己のことを語って以来、われわれも自分自身のことを語るができる。(cf. AWK, 228f.)

1821年夏ゲーテは72歳のときボヘミアのマリーエンバート温泉湯治中に17歳のウルリーケ・フォン・レーヴェツォーと知りあった。74歳のとき55歳年下の19歳の彼女に、カール・フォン・アウグスト公を通じ結婚を申しこんだが、彼女の母親や自分の息子に反対されて実現しなかった。その代わり「ヴェルターに」「マリーエンバート悲歌」など『情熱三部曲』(Trilogie der Leidenschaft, 1827)が生まれた。接吻までしたこの苦悩の恋をヴァルザーは2008年小説『恋する男』(Ein liebender Mann)で主にゲーテの内面から描いた。ヴァルザー自身80歳を越えてである。

(1) 「おまえの表現が噴火するのは、生涯つねに何か欠けていることから生ずる。すなわち欠けているのは愛だ。いま愛はある。すなわち愛は存在している。愛はたんに言葉の遊戯ではない。愛は最高に可能な確実さだ。愛は存在の最高値だ。最高の充溢だ。最大の安全だ。……彼はこの世の一切を断念できる、しかし彼女自身は断念できない。彼は彼女に対する愛により定義される。彼は彼女に対する愛なのだ。」(『恋する男』, LM, 156)

「彼は書くかぎり、彼女は存在した。書かなくなるやいなや、彼女は不在だった。」(LM, 157)

欠如と充足、不在と現前、無と有、無意味と意味の弁証法的力学は、「書くこと」にも「愛」にも通ずる。

(2) ウルリーケとゲーテとのあいだに手紙のやりとりがあったことは事実だが、『マリーエンバート悲歌』(G. 1, 381ff.)はゲーテの死後ウルリーケの知るところとなったといわれている。しかしヴァルザーは、彼が彼女にこのエレギーを贈ったことにし、彼女がそれに応えた手紙を創作している。

「ウルリーケが悲歌を知ったことをどのように表現しているかを読んだとき、ゲーテの心はすぐに早鐘のように打ち始めていた。それは蘇生、すぐに感じられる、生が高揚した心臓の鼓動であった。いかに彼女が悲歌を読んだかを読んだとき、彼の心はいまだかつてないほど軽くなった。読んだわ、また読んだわ、暗記できるまで読んだわ。私は悲歌を眼だけでなく、からだ全体で読んだわ、と彼女は書いている。肉体と魂とで彼女は読んだのだ。それを読んで、彼は生涯一度もなかったような幸福を感じた。……こういう詩は読んではいけないの。祝わなければなりません。祝祭を祝うように。と彼女は書いていた。これほど心に迫り、これほどあの運命全体を含んでいる詩や言葉はほかにありえないでしょう。この詩のなかで、この詩によって生ずるものがどれほど重かろうと、この詩はそれを美しくするわ。この詩によってどんな苦痛も美しくなる。そして美しくなることがどうやらある苦痛に生ずる最高に美しいことなの。私はどの行も好き。暗い詩句も明るい詩句もみな同じだわ。自分が少しでもこの詩の受信者と感ずることができることを誇りに思うわ、と彼女は書いていた。そして、私よりほかにこの詩をこれほど親密に理解する人は何千年経ってもいないだろう、ということがわかるから、誇りに思うの。これは私の詩。私の生。私の運命。私の詩なのだわ。」(LM, 226f.)

ウルリーケは95歳まで生きたが、生涯独身であった。

『情熱三部曲』は、苦悩を美に昇華し、実現しないむなしい恋を意味ある普遍の存在に铸造しえた、不滅の詩である。「人間が苦悩のうちに沈黙するとき、神は私におのれの悩みを語る力を与えて下さったのだ。」(Torquato Tasso, G. V. 166)「ああ別離のもたらす死をまぬがれようと／歌う詩人の声は胸に深くしみいる／なかば自分からこの苦悶にまきこまれ／耐え忍ぶ詩人に 神よ語る言葉を与えたまえ」。(『ヴェルターに』(G. 1, 381))

『悲歌』も『恋する男』も、言葉は無の支配、あるものをそれが存在しないほど美しく言うことだ、とするヴァルザーの主張の例証であろう。

(3) ウルリーケの存在は、否定的現前。不在こそ彼女の現前の形式という苦悩のパラドクスをヴァルザーは次のように描く。

「彼は、彼女の不在を彼女の現前の形式として考え体験することを、練習した。彼はこの思考形式を、パラドクスとして考えられるあらゆるものから解放した。彼女はどんな瞬間にも不在者として現前した。その結果どの現在の瞬間も弱められた。ヴァイマルに帰って以来この数週間行ったことや経験したことを、彼はいわば仮象にしたのだ。ウルリーケはいないが、本来はいなければならぬ、もし彼女がいるならそのときだけはじめて、彼が行ったり経験したことは、存在するようと思われる、という意識をもってつねに行ったり経験したりしたのだ。すべては代償であって、それは自分が代償すべきものへの注意を喚起させてくれるだけなのだ。ウルリーケ。正確に言えば、否定的現前(存在)なのだ。」(LM, 231)

ウルリーケの存在は、不在者として存在するという、否定的存在である。しかしこれこそ神や言葉や美の存在形式でもある。

結 ロゴス、言葉、命、光、美 (『生のなかば』)

小論は2000年から2004年に書かれたマルティーン・ヴァルザーのエッセイ集『無の支配』の書評でも要約でもない。この期間作者にとっては激動の時代だった。1998年の「平和賞」授賞スピーチ、ドイツ人の戦争責任、ユダヤ人問題、加害者と被害者をめぐる Ignatz Bubis などとの論争、『批評家の死』発表をめぐる Frankfurter Allgemeine 紙や Suhrkamp Verlag を巻きこんだ「アンティ・ゼミティスムス」論争、前者には賛成、後者には反対した FAZ 編集者 Frank Schirrmacher の意見、チュービンゲン大学 Friedrich Beißner 教授ゼミの同窓生、親友であり、ズーアカムプ出版社社長だった Siegfried Unseld の死 (2002)、Suhrkamp から Rowohlt 社への転籍 (2004) など、70歳代はまさしく波瀾万丈の時代だった。⁹⁾ その騒動のなかで焦点に収斂した光りが、無の支配としての言葉という自己のアイデンティティーである。自己存立の生命である言葉の意味づけである。言葉を生命とする文学、ひいては芸術の根拠といってもよい。

無の支配のなかで、無を支配できるのは言葉である。無に有を与え、無意味に意味を与えること、それが言葉であり文学であり芸術である。永遠に寄せては返す波のような無の永劫回帰に、生命ある存在を生み、意味を与えるものこそ「美」である。「この世は美的現象としてのみ是認される。」「芸術は生の最大の刺激剤。」「美的状態は伝達手段をあふれるばかり豊かにもっており、同時に刺激や徴候に対する極度の感受性をもっている。生き物のあいだで伝達が行われる絶頂である——これは言葉の源泉である。生命のあらゆる高揚は人間の伝達能力を高めるが、また同じく理解力も高める。」(N. III, 753) と、ニーチェもいう。

しかし美は仮象であり、はかない。無を成分とする生き物だ。美しいとは、いきいきとしていること、生命力にみちていることだ。生命も無から生まれ無に消えゆく、有限なつかのまの存在にすぎない。しかしだから美しい。日本人の桜への思い入れもそこに根ざしていよう。もののあわれが美であるゆえんである。ヴァルザーが言葉は無の支配という意味もそこにある。けっしてニヒリズムではない。否定ではなく否定をくぐりぬける肯定がそこにある。

ヴァルザーにとって、停滞、安定、硬直ほど生命に反するものはない。生命はつねに欠如、不足、欠損に甘んぜず、それを補足修復充足して進化しようとする。無に意味ある有を与えようとする。しかし有が安定凝固形骸化したら、それはまた生命を失い、死へと転落する。欠如は埋められみだされることを目標とするが、円現すれば権威となり生命を失い死に無となる。存在と無とのたえざる弁証法的生命力こそ美なのだ。ヴァルザーの「正の自己意識に基づくイロニー」批判もそこにある。権力に対する批判も同じ。力そのものは生命力のみなぎりという点で美しい。しかしそれが巨大となって権力を行使すると、美を失い醜くなる。ダヴィテとゴリアテは、小と大、美と権力、言葉と戦車を象徴する。権力とそれへの抵抗、これはヴァルザーの主題の核心である。運転手と雇い主、奴隷と主人、被支配と支配関係のなかで、いかに人間の存在証明をし、危機に瀕する自己のアイデンティティーを見出し、押しつぶされようとする自己意識を守ろうとするかが、ヴァルザーの生涯を貫くライトモチーフである。

愛も同じで、愛の美しさ生命力は、愛の不安、不信と裏腹である。「恋する男」のゲーテも、愛の確信と嫉妬、愛の力と無力、老いと若さの葛藤に、波のように揺れ動く。既存のいわゆる「諦念」モラルをひっくり返す。ウルリーケは、不在者として存在する、否定的存在である。仮象である。しかし神もしかり。言葉もしかり。美もしかり。これが無の支配としての言葉であり美（芸術）であらう。

*

最後にその実例としてヴァルザーが引用しているヘルダグリーンの「生のなかば」(*Hälfte des Lebens*, 1803) という詩を掲げたい。

黄の梨は枝をたわめ
 茨は咲きみちて
 野は湖に入る。
 むつまじい白鳥よ、おんみらは

くちづけに酔い痴れて
こうべをひたす、
きよらかな水に。

しかしわたしの悲しみは！ どこに
わたしは花を摘もう、冬になれば。どこに
日の光を
地上の影を求めよう。
囲壁はつめたく
ことばなく立ち 風吹けば鳴る、
屋根の風見は。

（手塚富雄訳、「手塚富雄著作集2」，中央公論社1981年312f.）

ヘルダリーンの全作品中、最も悲痛な詩であり、彼の内面の最深部の告白だが、それが伝えるものは限りなく深いと、訳者は言う。ヴァルザーはこの詩をアドルノの「誤った生のなかに正しい生はない」（Es gibt kein richtiges Leben im falschen, 「ミニマ・モラリア」, A, 43）⁹¹という語句の関連で引用する。自己の生が欠乏に苦悩していればこそ、充足を求める。壁に囲まれた冷たい現実から、日の光を浴び水にこうべを浸す白鳥の浮かぶ花咲く湖岸の風景を歌う。人生の無の風景ともいえる後半部に対照的に、前半部の自然風景のなんとという美しさ。無と有、陰と陽、現実と理想との懸隔の上に、詩の類例のない美しさが息づいている。この言葉の結晶は永遠の生命を得ているだろう。悲しみは白鳥となり、その悲しみの調べは、時と所をこえて、星の光りのように、われわれの心にまで届き、かつ訴えかけている。

無から生まれ、無に消えゆく人間にとり、無の支配に抗する武器は言葉である。言葉は無に存在を与え、無意味に意味を与える。無を支配するものこそ言葉である、というヴァルザーの主張は、根底において「はじめにロゴスありき」に通ずるのではないだろうか。「…ロゴスは神であった。すべてのものはこれによってできた。……このロゴスには命があった。この命は人の光であった。」（ヨハネ伝 *Johannes I*, 1-4）ロゴスは理性、理法、言葉と訳されている。ハイデガーによれば、ドイツ語は Grund, ラテン語は ratio であるという。（「根拠律」）⁹²あらゆる存在の根拠がロゴス、言葉なのだ。「はじめに自然ありき」「色即是空」、神仏も自然と一体と感ずる日本人にとって、「ゲルマン的」「異教的」と批判されるマルティーン・ヴァルザーもまたキリストの精神的基盤に深く根差す詩人であるのではなかろうか。

*

プロヴァンスのサント・ヴィクトワール山を前に、自己の色と形式により自己のサント・ヴィクトワール山を数十点描いたボル・セザンヌ。そのセザンヌの画と対象の自然との関係をたどり、画家の創作原理と自然に「教え」を求めたベーター・ハントケの「サント＝ヴィクトワール山の教え」も、マルティーン・ヴァルザーの「無の支配」に通ずるところがある。これは今後の課題としたい。

註

- (1) Martin Walser, 2004 : *Die Verwaltung des Nichts*. Rowohlt Verlag, Reinbek bei Hamburg =VN
2003 *Mehrere Vorreden zur Verwaltung des Nichts* 【無の支配序説】
2002 *Das menschliche Ermessen* 【人間的裁量】
2003 *Vokabular und Sprache* 【定型語彙と生きた言葉】
Martin Walser, 2000 : *Ich vertraue. Querfeldein*. Suhrkamp, Frankfurt am Main
1999 *Sprache, sonst nichts* =SsN 【言葉, そのほかは無】
Martin Walser, 2007 : *Zauber und Gegenzauber*, st. 3327, Suhrkamp
1986 *Meine Muse ist der Mangel* =MMM 【わがミューズ神は欠如】
Martin Walser, 2002 : *Aus dem Wortschatz unserer Kämpfe*. Suhrkamp =AWK
1982 *Goethes Anziehungskraft* 【ゲーテの魅力】
1986 *Hilfe vom Selbsthelfer. Ein Versuch über Goethe* 【自ら助ける者の助け】
1984 *Was ist ein Klassiker?* 【クラシカーとはだれか】
Martin Walser, 2008 : *Ein liebender Mann*. Rowohlt Reinbek =LM 【恋する男】 (引用順)
- (2) Friedrich Hölderlin, 1957 *Hyperion : Sämtliche Werke*, Stuttgarter Hölderlin Ausgabe, Kohlhamer
Stuttgart =H. Bd. 3.
1951 *Gedichte nach 1800*, Bd 2-1 (H. 2, 3 で第 2 巻 3 ページをさす)
- (3) Friedrich Nietzsche, 1966 : *Werke in drei Bänden*. Herg. Von Karl Schlechta. C.Hanser, München =N
(N. I, 2 で第 I 巻 2 ページをさす)
- (4) Martin Walser, 1981 : *Selbstbewußtsein und Ironie*. Suhrkamp / マルティーン・ヴァルザー 【自己意識とイロニー】 洲崎恵三訳, 1997 法政大学出版局, 参照
- (5) Thomas Mann, 1974 : *Gesammelte Werke in 13 Bänden* S. Fischer Frankfurt am Main = TM
- (6) 洲崎恵三, 2002, 【トーマス・マンー神話とイロニーー】 溪水社, 365ページ以下参照
- (7) Johann Wolfgang von Goethe, 1998 : *Werke in 14 Bänden*, Hamburger Ausgabe, Deutscher Taschenbuch Verlag München =G
- (8) この間の事情は Jörg Magenau, 2005 : *Martin Walser. Eine Biographie*. Rowohlt Reinbek bei Hamburg が詳しく, ひじょうに興味深い伝記である。日本では遠山義孝, 2007, 【ドイツ現代文学の軌跡ーマルティーン・ヴァルザーとその時代】明石書店, 三島憲一, 2006, 【現代ドイツー統一後の知的軌跡ー】, 岩波新書, 参照。
- (9) Theodor W Adorno, 1997 : *Minima Moralia : Gesammelte Schriften*, Bd. 4 Suhrkamp =A
- (10) Martin Heidegger, 1957 : *Der Satz vom Grund*. Neske Pfullingen

Sprache — Die Verwaltung des Nichts — Martin Walser —

Keizo Suzaki

In *Hyperion* spricht Fr. Hölderlin vom „Nichts, über uns waltet“. Die Herkunft dieser Welt: Nichts. Ihre Zukunft: Nichts. Das ist aber kein Nihilismus. Wenn auch unsere Welt von selbst keinen Sinn hat, können wir etwas, was keinen Sinn hat, nicht ertragen. Also geben wir dem, was keinen Sinn hat, einen Sinn. Das macht Sprache, Literatur, Kunst. Wenn Nichts in der Welt verwaltet, verwaltet es die Sprache, um Nichts einen schönen Sinn zu geben. Hölderlins Gedicht besteht darin, gegen das Ausruhen im Negativen und aus Nichts und Gegennichts einen einzigartigen Ton zu formen. Goethes Dichtungen gefallen M. Walser, weil sich Goethe gegen Sinnlosigkeit schön sträubte. Beiden ist am wichtigsten, sie zu beleben. Das Lebendige ist das Schöne. Leben ist Lieben. Durch die qualvolle Erfahrung mit Ulrike vo Levetzow, aus ihrer Abwesenheit entstand die *Marienbader Elegie*.

Walsers Muse ist der Mangel. Sprache drückt unsere Bedürfnisse aus. Gott, zum Beispiel, ist unser Wunschbild von allem, was uns fehlt: Ewigkeit, Allwissenschaft etc. Es gibt aber persönliche Sprache und offizielles Vokabular. Vokabular zielt auf Weltbeherrschung, Autorität. Die Sprache, die nur aus eigener Erfahrung entspringt, ist beschäftigt mit der Verwaltung des Nichts. „Meine Arbeit: etwas so schön zu sagen, wie es nicht ist.“ Die Verwaltung des Nichts bedeutet das lichtsüchtige Anschreiben gegen die Finsternis des Nichts, die Verklärung unserer Mangelhaftigkeit durch die Sprachkunst. Diese Ansicht hinge eng zusammen mit derselben Nietzsches: „nur als ästhetisches Phänomen ist das Dasein der Welt gerechtfertigt.“ Um das dionysische Dasein zu ertragen, schöpften die Griechen die apollinische Kunst des Traumes. Das ist meines Erachtens eine kern-europäische Denkweise, denn im Anfang war *λόγος*, so steht es in der Bibel, während unter einem japanischen Gesichtspunkt die Natur *ἀρχή* war. Logos ist Sprache, Licht, Leben, also Gott. Alles, was mit der Sprache gemacht wird, ist nun einmal die Verwaltung des Nichts: dem Nicht-Existenten Sprache zu verleihen, um sich gegen das dunkle, sinnloses Nichts mit der schönen, lebendigen Sprache zu wehren.